慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アーサー・ペンティの歴史観（三、完）
Sub Title	
Author	加田, 哲二
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1921
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.3 (1921. 3) ,p.438(128)- 449(139)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19210301-0128

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

本人飛脚　彌七郎
請人　久七
組頭　藤四郎
同斷　元兵衛
庄屋　瀧兵衛

如悦町機屋行司中

嘉永三年二月下荷がなしたる定書なるものあり次の如し

定

一、近來荷持之者共一統道中にて博奕增長仕御荷物甚以麁略に相成候趣自然御上樣へ逢御聞に此度御行司樣より急度遂吟味を不埒之者共相除以來慥成者相見立通行可致由被仰付委細奉畏候

一、博奕請負之事

一、御荷物大切に可致事

附夏五日、冬六日限日京着事

一、下り金銀大切に可仕事

一、大酒相愼可申事

一、何事に不寄喧嘩口論相愼之事

右條立の通向後友吟味可仕候萬一不心得の者在之候はゝ共節何事に不寄如何余被仰候共銘々共より急度吟味之上少しも御難題相掛申間敷候爲後日之仍而連印如件

年月日　下荷持　十九名連印

御飛脚衆中樣

アーサー・ペンティの歴史觀（三、完）

加田哲二

八

ギリシアの文明を崩壞した無制限の通貨はまたローマに輸入されて、さうして同じやうな社會的害惡を生じたのである。個人主義的思想は旺盛となり、ローマ法は實にその產物であつた。ローマの法律は、ギリシアの法律と異つて、正義を確保するために制定せられたのではなく、反つて一般の秩序を犧牲にして腐敗せる社會を維持するのが、その目的であつた。即ちローマ法は無制限の通貨が資本主義を隆興し、資本主義が、更らに、社會的混亂を生じたときに、この不正義を法律的に承認するのが、その目的であつたのである。從つて、そは道德律に關係のあるものではない。その目的は、中世紀の法律の如く、よき人をして惡しき人の間において、生活することを得せしめるにはなくつて、反つて富者をして貧者の間に生活するを得せしめるのにあつた。斯くの如く、ローマの文明は個人主義的であり、利己的であつた。今その一々の例についてPentyの記する所を紹介するの餘裕はない。たゞ之が、利己的精神の支配せる所であり、さうして、その利己的精神の結晶たるローマ法が歐洲の眞の人文の進步を阻害し、近代における個人主義的社會の出現はローマ法の復活に負ふところ頗ぶる多きを記してゐる點を注意すれば足るのである。

九

斯くの如くギリシア並にローマの文明は失敗に終つた。之は通貨の創始後の經濟問題を解決することは出來なかつた。その主たる理由は彼等の人生觀が異敎的哲學の上に立脚してゐたからである。彼等の哲學は官能的享樂の基礎の上に立つた自己滿足、自己承認の哲學であつて、斯かる哲學は外國貿易によつて富が集積せられたときにおいて、人々をして、自己の欲望を抑制することを不可能ならしめたのである。即ち物質主義の崇拜は經濟問題を紛糾せしめるのみで、之を解決することが出來なかつたのである。然るに中世紀に至つて、その經濟問題が兎に角解決せられたのは、ギリシア並にローマにおけると異れる精神がその間に存したからである。之れは即ち簡單に中世紀主義と稱するもので、Pentyが社會問題解決の標準としたものである。

故に以下中世紀に關する彼の史觀を紹介することによつて、一先づ、本篇を終結せしめやうと思ふ。Penty は歴史の進行の動力を精神に求める。故に第一に叙述すべきものは、中世紀は如何なる精神的の基礎の上に置かれたかと云ふことである。その第二はその精神的基礎の上に礎かれた社會組織は如何と云ふ問題である。その第三はその精神と組織との結果たる文化は如何と云ふことである。こゝには文化の代表的のものとして中世紀において科學と藝術は如何なる意義を有してゐたか、またその發達の程度如何の問題を紹介するに止めやうと思ふ。

十

ギリシア並にローマの社會によつて釀生された社會的害悪を救治したのは、一の精神である。その中世紀において行はれた一の精神とは即ち基督教のことである。初期基督教は、未來の生命の幸福と云ふことに對する教であつた許りでなく、現世における社會的救濟の福音であつた。この未來の福音と現世の福音とは基督教にあつては、共に重要なものであつた。基督教が民衆の間に大勢力を得るに至つた最大の原因は、そが來世と現在との救濟を併せ説いたからである。さうして初期の基督教は、その使徒等の共産主義的傳統を繼續したのであつた。從つて彼等は社會における共同關係を助長するのを目的とした。彼等の見るところに據れば神の親性は人間の同胞性を包含してゐるのである。故に男女が平等のものとして共に生活し、財を共有にしてゐるならば、彼等を結合すべき何等かの共通觀念がなければならない。彼等の間に共同觀念が行はれる爲めには、彼等は何等かの權威即ち個人の意見以上の行爲の原則を認めなければならない。彼等は第一に自己の利益を追ふと云ふ精神を防止しなければならない。もしも富は之を所有すべからざるものとすれば、彼等は之に對して無關心であるべき精神を涵養しなければならない。斯くの如き思想が基督の社會的方面における福音である。さうして、この福音を宣傳することによつて、基督は世に新しい道德の原理を紹介したのである。斯様な精神が經濟的方面において共産主義となるのは必然的の結果である。

けれども初期基督教の共産主義は僧侶の間を除いては早く、崩壞の運命に逢着したけれども歐洲を蹂躙した蠻民が數世紀の間土地共有制度を維持して行つたのは、實に基督教の感化に依るのである。然し、基督教並に中世紀は、そが財産に關する點において少くとも誤解を受けてゐる。この誤解は中世的見解の保持者の代表者としてSt. Thomas Aquinas を採るからである。彼の財産に對する態度は、要するに嚴然たる社會的の事實と基督の福音との妥協的性質を帶びてゐるものである。第十三世紀にあつては教會は既にその手に巨大なる富を集積した。教會は當時歐洲の土地の三分の一を所有してゐたのであつた。斯くの如き狀態にあつて、Thomas のなし得る實際的の方策は財産を道德化することであつた。Aristotle の云ふ「私有財産と共同の使用」と云ふことが彼の財産に對する標準となつたのである。所有は絶對的と看做されず、ある義務の遂行をその條件としたのであつた。斯様な Thomas の見解は眞實の中世的教義でなくしてそは、前に述べた如く、事實と福音書との間の妥協に過ぎない。斯くの如き精神的狀態は社會組織の上において何を生んだか。

十一

ギルドの勃興に寄與したものは、基督教の共

產主義的精神である。ギルドは保護と相互扶助の必要の結果出現したものである。その最初の形態は宗教ギルドであり、そはまた社會的の機能をも勤めたものである。その基金は、聖餐、死者の供養、埋葬費、慈善的補助等の目的に使用されたのである。さうしてローマ帝國の崩壞は外敵防禦のための團結を必要とした。斯くの如き起源から起つてゐるものは Frith Guild と稱するものである。

中世紀に至るに從つて、ギルドは經濟的任務を帶びて來たのである。クラフト・ギルドの第一の目的は同一事業に從事するために結合したすべての人のために產業管理の完全なる組織を樹立することであつた。故に中世紀の工匠はギルドの規定によつて束縛されてゐたのである。ギルドの規定は、その中に社會組織を包含してゐた。さうしてその社會組織によつて個人は全然支配された。即ちその社會の道德と習慣とは個人を支配せるものであつた。そは單に經濟上において個人を支配したのみでなく、藝術上において宗教上において均しく個人を支配したものであつた。

斯くギルドが宗教的色彩に富んでゐたと云ふことが、そが經濟的團體として成功せる所以である。何となれば人類同胞と人類連帶の思想はそがローマ帝國の支配下において資本主義の勃興のために破壞されてから、再びこの世界に齎らされたのは基督教によつてゞあるからである。この人類同胞の觀念があつたがために、中世紀の中心的經濟思想である公正なる價格」Just Price の觀念が可能となつたのである。そは、征服と掠奪とを以て、宇宙の自然的秩序と考へてゐたローマにあつては考へることの出來ない思想である。「公正なる價格」と云ふ觀念があれば、交換の增加による資本主義の發達と云ふ餘地は全然ない。何となれば、そは通貨の交換の媒介物としての本來の使用にのみ、その使用を制限することを要求するからである。さうしてこの「公正なる價格」と云ふ中世紀の觀念よつてのみ通貨の制限が可能となつたのである。

公正なる價格は一定の價格である。公正なる價格を維持するために、ギルドはその都市にその事業の全般に渉る獨占的特權を有する團體でなくてはならない。何となれば獨占によつてのみ一定の價格が維持し得るからである。さうして斯くの如き團體の、その各員に對する權威こそ、買占、僞造等の形態における營利を抑壓することが出來たのである。この規定を破つたものは初は罰金を賦せられ、最も重罪は、このギルドからの除名である。この除名によつてその組合員は、その都市における營業の特權を剝奪されるのである。

斯樣な「公正なる價格」は、單にたゞ道德的行爲のみによつては維持することが出來ない。全生產の價格を一定しやうと云ふならば、そはたゞ物の品質の標準が確定し得る場合にのみ行はれることである。さうして品質の標準は法律の規定によつて、解決を下すことは出來ないので、品質の標準を維持するためには親方の手に權威を認める必要が生じて來る。この親方の數を常に過不足のないやうにするために、徒弟を養成し、仕事場の大さを定め、勞働時間、生產高を定める必要がある。かくの如くすべてのギルドに關する規定は「公正なる價格」と云ふ觀念をその基礎としてゐるのである。故に公正なる價格なる觀念はギルド全體の基礎である。然し、ギルド發生の初期にあつては、ギルドは各生產業毎に設立されたものでなくして、もつと包括

的なものであつた。さうしてこの包括的ギルドから個別的産業のギルドへと進んで行つたのである。

中世ギルドは協同的生産を以て私的生産に代へるのを目的とした團體ではない。ギルドは自治的仕事場の組織を求めたのではなくして、産業に入つて來るすべての人に均等なる機會を與へるやうに産業を組織するのにあつた。

ギルド制度の批評家はギルドが獨占的、排他的性質を帶びてゐたことを非難する。さうしてその證據として親方のギルドと職人の團體が存在して、互にその利益が相衝してゐた事實を指摘する。然し、このことはギルド制度に對する正當な非難とはならないのである。初期のギルドの時代にあつては、ギルドは排他的性質を帶びてゐたと云ふのは全く當らない議論である。彼等は如何にして、人々をギルドの內に包含すべきかを苦心したのである。公正なる價格を維持する何人に對しても、ギルヅマンたるべき特權を附與しやうとしたのである。ギルドが排他性を帶びて來たと云ふのは全く外的事情によるので、ギルドそのものの中に發生した事情ではないのである。換言すれば、ギルドの發達によつて排他性が齎らされたのではなくして、ギルドの外的原因による腐敗によつて、ギルドに關するあらゆる害惡が齎らされたのである。ギルドそのものは人類の同胞主義を經濟的方面において體現したもので、中世ギルド時代を稱して、親方と職人との相反する利益の對立してゐた時代とする共產黨宣言の歴史觀は、眞にギルドの文化的意義を知らないものと云はなくてはならぬ。然らば、中世の斯くの如き社會的調和の生活にあつて、科學的發達の狀態如何とその藝術的表現たる建築の如何とを見て、その文化の價値を窺つて見やう。

十二

中世紀における智識の狀態は一般に誤解されてゐると云ひ得る。中世紀に關する一般の觀察は、敎會が人心を支配してゐたときは、所謂「永き中世の夜」であつて、敎育は阻害せられ、化學と實用の天文學の研究とは抑壓せられ、人體の解剖は異端の實驗と看做され、すべての思索は演繹的で、ある者は卑金屬を黃金に變化すべき「哲學者の石」を求めるに時間を浪費し、從つて一般の民衆は無智と迷信との間にその生を終つたやうに云つてゐる。さうしてすべての進步は敎會によつて迫害された學者によつてなされた。斯くの如く中世は科學に對して偏見を持つてゐたのである。かう一般の中世紀批評家は云ふのである。

この觀察と批評とは果して當つてゐるか。Penty は之に對して否と答へるのである。中世紀における科學は、それが正當な指導的原理即ち道德律に反せざる範圍においては、その研究の自由を有してゐたのである。例へば化學を採つて見ると、ある人々は法王がこの科學に對して禁止命令を出したやうに解せられてゐる。然しこの解釋は不當である。彼等の上諭の目的としてゐたことは化學の研究の抑壓ではなくつて、海水より金を得ると云ふやうな錬金術に對してである。何となれば、錬金術は人々を欺瞞することによつてのみ爲し得るところのものであるからである。要するに正當なる科學は法王によつて奬勵せられ、さうして保護せられたのである。

次に人體解剖の禁止と云ふことを見やう。この人體解剖と云ふことは、身體の復活と云ふ基督敎の敎義と背反する故を以て、異敎的實驗で

あると教へる人もある。然るに基督教の身體復活に關する教義は、何等現實の身體に關係のあるものではない。從つてそは教會によつて禁止はされてはゐなかつたのである。Boniface VIII の上諭は通常解剖を禁止したかの如く解されてゐる。然るに、この上諭が眞に解剖を禁止したか否かの質問に對して Benedict XIV は明かに、それがその禁止を意味するものにあらざる旨を教へてゐる。

斯くの如き科學の尊重は中世におけるサラセン民族からの科學の輸入を見るときに更らに明瞭となる。中世紀において歐洲がサラセン民族から科學を輸入したことは洵に事實である。然しこの科學の輸入と云ふことから當時において歐洲の文明がサラセン文明より低度の文化を有してゐたものだと考へるのは明白なる誤謬である。サラセン民族は既に、ローマの文明の傳統を有するこの帝國を建設したのであるが、中世教會は蠻民によつて蹂躙された西洋文明を、その新精神に基いて改造すると云ふ困難な仕事を持つてゐた。さうして、このことは、その初期においては最も遲々たる過程であつた。斯くの如き事情を吾々の腦裡に收めて、科學輸入の事實に對して見ると、サラセン民族がヨーロパ民族よりも早く Aristotle を知り、その當時の科學を知つてゐたことは當然のことでなくてはならない。さうして歐洲民族は虚心平氣を持つてこの科學を輸入したことは、當時の歐洲において希臘哲學殊に Aristote の研究が隆盛を極めたことによつて知り得るのである。

斯くの如く科學輸入當時にあつて、歐洲の思想界、科學界を支配したものは同じく基督教である。さうして基督教中の St. Dominic と St. Francis とかその指導者であつた。彼等は宗教（信仰）と科學とが共に相携へて行くべきものであることをこの世に示した人である。さうして彼等は新興の富と智識との勢力に對して基督教を擁護したのである。彼等以後二世紀に渉る歐洲の思想界は全く彼等の影響を受けた。St. Francis は社會的害惡がその根底において人心の腐敗あることを見、さうしてこの人心の腐敗を矯正するのには富より離れることが必要であること、貧と勞働と隱遁の福音を說いた。然るに St. Dominic は現世の文明を是認し智識その用法の如何に從て、害とも益ともなると云ふ見地から、智識を一の指導的原理によつて統制して行かふとしたのである。かくて St. Francis はこの世に新しい精神を齎すことにより、St. Dominic は智識を道德化することによつて社會的害惡を救治せんとしたのである。

斯くの如き態度の結果として、歐洲の智識界を支配したものは、ドミニカン派の僧侶である。さうして彼等の中 Albertus Magnus, St. Thomas Aquinas とがこの代表的人物であつて、その講學の範圍は心理學、哲學、物理學、生理學、自然史、並に道德及び社會科學に及んでゐる。Magnus の大冊二十一冊の著述と Thomas Aquinas の Summa Theologica とはその研究の成果である。さうして彼等の講學の方法は單に演繹法のみならず、歸納法をも用ゐてゐるのである。即ち現代科學の方法たる實驗による歸納法は彼等が科學研究の際用ゐた方法であつて、この點において現代の科學はその方法を中世の遺產を繼承したものと云はなくてはならぬ。かくの如く科學的研究の旺盛であつたので世に傳ふる如く、Bruno や Galileo の迫害されたのは、その科學的研究のためでなくて、この異教的思想のためであつたのである。要するに

中世における科學の進歩はそか人間の道德律と背することのなかつた點において優秀なるものがある。

十三

中世紀がなし遂げた諸種の效績の中で最も偉大なる效績はその藝術である。殊にその表現たるゴシック建築において之を見ることが出來るのである。ギリシア並にローマの建築が一指導者の命令によつて、建設せられたのに反して、中世のゴシック建築は各勞働者の勞働そのものが直ちに藝術となつて建築に表現されたのである。ローマ、ギリシアの建築が貴族的、專制的で、從つてその建築に從事した勞働者が奴隷的狀態にあつたのに反して、中世における勞働者とその指導者との間の關係は經濟的從屬の關係ではなくつて、技術上における優劣の問題であつた。從つて彼等の間には技術の崇拜はあつたけれども、物質關係における從屬はなかつたのである。即ち技術者間における關係は甚だ自由であつた、單に技術上の關係においてのみ、劣者は優者の指導を俟つ關係にあつたのである。かゝる自由なる關係はその藝術の上に直ちに表現されて、ゴシック建築が協同主義の精神によるにも拘らず、この建築に參加した勞働者の個性は、即ちその藝術的精神は、建築の一柱一石に表現されたのである。かゝる自由を享樂した彼等はまた自由の限界を知つてゐた。さうしてこの自由の限界を嚴密に守ることによつて、中世紀は調和ある社會となつたのである。斯くの如き指導的精神によつてのみ、ゴシック建築の如き優秀なる藝術を生むことが出來たのである。

以上を以て中世紀の主要なる文化現象に對するPentyの論述は終つてゐる。如何にして斯くの如き文化を生んだか。そは、中世紀が一の正しい精神の上に立脚し、その精神を體現する場合において、機能的組織をとり、その機能的組織が互に相侵すことがなかつたからである。かくてPentyはこの見地から現代の社會問題を見、それが放慢なる個人主義と集中主義にあることを發見し、この不正なる社會を指導的原理のあつた中世的組織に復活することによつて解決せんとするものである。Pentyの史觀は斯くの如き立場にあるのである。

附記、ギルド社會主義の最初の文獻の一であるPenty:—Restoration of Guildsystem, 1906 が絕版の爲め、同氏のギルドに關する詳細なる意見を聞くことを得ないのは、筆者の最も遺憾とするところである。（完）

ギイデイングスの歴史學說（上）

野村兼太郎

社會學者として著名なFranklin H. Giddingsが最近"Political SCience Quarterly," vol. xxxv. No4". A Theory of History"なる一篇を掲げて、歴史に對してある一つの觀察を下して居る。多少興味ある問題であると思ふから敢てこゝに紹介する。此の一篇は其の意譯である。

一

かの「死の書」The Book of The Deadが編纂されない以前に、すでに歴史に關する學說は存して居たゝらう。此の痛快なNilitic文獻の表題自體が存して居たことを暗示する。是は更に疑はしいことではあるが、恐らく吾人Adamの家族達が忘れられてしまつた後と雖も歴史學說は存するだらう。Friedrich HegelやKarl Marx